

盛岡市史



通史編
上 卷

現代

盛岡市の概要

市章



盛岡市章

1906(明治39)年3月27日制定

盛岡市の市章は、菱形^{ひし}2つを直角に交差させたものです。菱形は江戸時代に盛岡を治めた南部家が甲斐源氏の一族であったことを表しています。また、折り鶴^{かみ}を図案化したようにも見えることから、南部家の紋章である“鶴”を象徴しているという説もあります。

市の花・木・鳥



花 [カキツバタ]

さわやかな初夏に紫色の花を咲かせます。古くから市内の各地に自生しており、山岸宇太平地区に群生しているカキツバタは県の天然記念物に指定されています。アヤメ科。



木 [カツラ]

山地に自生する落葉樹で、シダレカツラはその変種です。肴町と大ケ生の瀧源寺、門字真立地区内のシダレカツラは国の天然記念物に指定されています。カツラ科。



鳥 [セキレイ]

中津川の周辺でよく見られる親しみやすい鳥です。オスとメスの仲がよく、水をたたくように尾を上下させて飛ぶ姿はとてもスマートです。セキレイ科。

面積・位置



市域の位置

区 分	盛岡市の位置				市庁の位置	
	北端	南端	東端	西端	地名	
緯度・経度	北緯 39° 55′ 49″	北緯 39° 33′ 50″	東経 141° 31′ 39″	東経 140° 59′ 43″	内丸12番2号	北緯 39° 42′ 07″ 東経 141° 09′ 15″
距 離	南北 40.7km		東西 45.6km			
最高点（標高）	1,427m（毛無森）					

資料 国土交通省国土地理院

- 注) 1 東西南北の各端点および市庁の緯度・経度は「都道府県市区町村の東西南北端点の経度緯度」による。
2 距離は、各端点の緯度差、経度差から計算により算出。
3 最高点(標高)は、「毛無森」の山頂付近に設置された三等三角点「毛無山」の標高値による。

(出典 令和4年度版盛岡市統計書、国土交通省国土地理院)



水、緑、道、環境を整える。
歴史あるまちを守りながら
もりおかは、ひらかれていく。



第1節 都市計画・都市構造

中心市街地の まちづくり ～戦後のまちづくり～

第3節 盛岡市民と交通

第4節 緑地と水辺

第5節 治水・利水と上下水道

第6節 環境

災害・防災 ～主な災害と減災を目指す 取り組み～

第1節 都市計画・都市構造

I まちづくりの理念

1 ^{いにしへ} 古から現在、未来へ

盛岡市は歴史と自然が豊かに息づく都市である。このまちで人々はその愛着もつ歴史と多様な自然を日々呼吸している。

現在の盛岡市の都市としての骨格は、2代盛岡藩主南部利直^{としなお}の時代に築かれ、およそ250年の江戸時代を経る。それゆえ中心となる盛岡城は現在も盛岡市の物心両面にわたる要となっている。城郭を中心とした都市構造は今日も脈々と続き、同時に南部家代々が築いた時代への思いと愛着は世代を超えて人々に引き継がれている。その時代の記憶が器としての都市とともに、ここに暮らす人々の思考にも深く息づく。こうした歴史的まなざしは、江戸時代という枠を超えて、戦国時代、さらに古代の歴史へも開かれる。時代を超えた歴史性へのまなざしは、過去への深みをともなう、翻って未来へも開かれている。過去、現在、未来へと時代や時間の軸を紡ぎ出しているのが盛岡市の都市であり都市計画の特徴の1つである。

盛岡市は都心を囲むように田園地帯が広がり、そのなかをいくつかの河川が流れる。見渡すと遠景、中景、近景と大小の自然が幾重にも目に入る。色とりどりの樹木草花はもちろん、中心街にまでも、サケ、リス、白鳥たちをはじめ、カモシカや時には熊も、動植物をはじめ多様な自然が存在する都市である。水、空気、太陽、星々、県庁所在地でありながら、これら多様な自然と身近に触れる都市は全国的にも珍しい。現代都市では薄れてきたさまざまな自然が盛岡市の都市空間に浸透している。一方、自然とは時に人間社会に被害をもたらすこともある。人工的に制御しつくせないのも自然である。気象現象をはじめ予定不調和の出来事も自然は持つ。こうした多様な自然との対話を盛岡の都

市は重ね続けている。

各時代の英知のもと築かれてきた盛岡市だが、本節が主対象とするのは戦後の都市計画となる。その上ではまず石川栄耀^{ひであき}（通称：えいよう）の存在は大きい。石川は戦後日本の都市計画の先駆者として知られるが（日本都市計画学会には最も荣誉ある「石川賞」がある）、中学時代を盛岡で過ごした縁もあり盛岡市にも訪れ講演会などが開かれている。盛岡市顧問としての講演会【資料編 資料2-1】では「盛岡の一番大事なところは菜園です。しかもあれだけ映画館が集ったことは偶然でもあります。又市の良き英断でもあったと思います。」と現在も続く盛岡市中心部の特徴への指摘も見られる。石川は制度・技術といった枠を超えて非常に人間味あふれる都市計画を追求した。都市美運動や盛り場の研究、「愛の都市計画」といった極めて先駆的、興味深い活動をしている。さらに「都市計画は物の上の計画であったのは誤りでした。都市計画はやはり人心——人間の気持ちの上に、人間の真理の上に計画されるべきものでなければならない。」といった石川の考え、これは現在の盛岡市都市計画が持つ（当然、課題はあるものの）優れた姿勢でもあり、未来に引き継ぐべき理念である。

こうした人間的愛情豊かな理念が息づく盛岡市の都市計画だが、都市の計画の上で、また市民にとって、最もインパクトがあった出来事は新幹線の開通だろう。ここには新しい時代の到来への期待の一方でさまざまな不安もあった。その1つに「盛岡が平均的都市になることを市民も行政も恐れた」ことがある。歴史と自然が脈々と息づく都市であることの認識とそれを守り育むことへの自覚を盛岡市は持っている。それがゆえに苦悩しながらも培われた「盛岡らしさを生かしながら住みよい環境を創ろう」とする姿勢が「自然環境にとどまらず、もりおかの



盛岡市史現代

通史編 上 卷

盛岡市史



通史編
下 卷

現代



先人たちは学んできた。
 もりおかの人々は、学びの力を知っていた。
 私たちも学び、未来を切り拓いていく。



第1節 戦後教育の展開

第2節 高度経済成長と教育

第3節 学校教育の現在

第4節 社会教育の推進

第1節 戦後教育の展開

I 戦後教育の出発

1 敗戦と教育

盛岡が最初に空襲を受けたのは、1945（昭和20）年3月10日午前2時30分頃であった。明治橋方向から侵入した米軍長距離爆撃機B29、1機が、盛岡駅周辺に大量の焼夷弾を投下し、一瞬にして駅前は大火災となった。被害は、死者4人、全焼家屋147戸、半焼8戸、罹災者655人にも上ったとされる。そのときの爆弾やサイレンの音、防空壕での不安や恐怖、罹災者への同情がつづられ、敗戦から6年たっても、戦争は、生々しい記憶として子どもたちのなかに残っていた【資料編 資料5-1】。

中国、満洲、朝鮮、台湾、樺太などから引き揚げてきた子どもたちにとって、戦争の記憶と体験は、さまざまな軋轢をとまなうものでもあった。1948年に青山小学校、厨川中学校から座談会に出席した子どもたちは、外地での大きな家での生活、青島でのにぎやかなお祭り、南京での葬式「泣き女」の姿、スケート、動物園などの娯楽、内地では触れることのない、異国体験・異文化体験を語っている【資料編 資料5-2】。その一方で、苦勞しながら戻った盛岡での、引き揚げ者に対する心ない言葉（「青山町はヤミ屋」の集まり、「引揚げ者の馬鹿野郎」など）に深く傷ついていた（【資料編 資料5-2】の座談会での他の発言）。

1945年8月14日に、日本は、ポツダム宣言の受諾を決定し、15日に「玉音放送」によって、国民に敗戦が知らされた。盛岡中学（現：盛岡第一高等学校）では、岩山で勤勞動員による開墾作業（蕎麦播き）を行っていたが、隊列を組んで学校に戻り、暑い校庭で放送を聞いた。「カーンと死んだように静まり返って」、新田信寛校長が「大御心を戴し、泰平の世を築かねばならない」と講話したという。しかし、8月中

は、いまだに開墾や蕎麦播き、農事試験場の勤勞奉仕などが続き、「戦時教育」の延長にあった。

また、この頃の世相を表すものに、1946年に、盛岡中学第5学年の作文がある。「世相批判」という課題でつづられたものだが、そこでは、「大半の生徒が食糧事情について論じて」いて、「腹が空いて勉強も録に出来ないといふもの」、「悪質農家を糾弾するもの」、「隠匿物資の徹底的摘発を叫ぶもの」などがあり、次には、「道徳心の頽廃を慨嘆したもの」で、「食糧難による社会悪」や「農民の道義頽廃を嘆くもの」、そして、「復員軍人、傷痍軍人、遺家族に対しての冷淡な人びとの態度、特に女性の輕薄さを憤慨するもの」が続いている。

このように、さまざまな体験と記憶を持った児童・生徒と、そして、敗戦後の混乱する世相のなかで、新しい教育への転換が進められたのである。

9月15日、文部省（当時）は「新日本建設ノ教育方針」を発表し、「国体ノ護持」に努めながら、「軍国的思想及施策ヲ払拭」して、「平和国家ノ建設」が目指された。20日には、「終戦ニ伴フ教科用図書取扱ニ関スル件」（地方長官宛文部次官通牒）で、戦時教材の削除が発せられた。いわゆる「墨ぬり教科書」である。

2 進駐軍関係文書

岩手県では、1945（昭和20）年9月16日には、進駐軍が来県し、司令部は教育会館に、兵舎は盛岡工業専門学校（現：岩手大学）に置かれた。教育現場は進駐軍の指令に対応していくが、盛岡高等女学校（盛岡高女、現：盛岡第二高等学校）に残された『昭和二十年九月以降進駐軍関係文書』が貴重な資料で、この間の経緯を詳細に示している【5001】。

26日に、先の文部次官通牒と同じ内容の「終戦ニ伴フ教科用図書取扱ニ関スル件」が「岩手県内政部長」名で発出され、削除または取り扱



人と街を慈んできた盛岡の人びと。
その想いから生まれた活動が
街の魅力と未来を創っていく。



第1節	戦後民主化と岩手国体に向けた運動の広がり 1950～60年代
第2節	都市の拡大とコミュニティ行政の推進 1970～80年代
第3節	新しい担い手による多面的な活動の展開 1990～2000年代
第4節	少子高齢社会における市民協働の進展 2010～20年代
第5節	ポスト・コロナ時代へ向けて 「多様性」を受け入れ、大切にするまちへ

第1節 戦後民主化と岩手国体に向けた運動の広がり 1950～60年代

I 戦後の民主化と地域自治の組織の再編

今日の盛岡市の礎を築いた先人の努力を振り返るとき、そこには常に無名の市民が流してきた多くの汗があった。本章では、市民が自ら育ててきたさまざまな活動が、どのような思いで創始され、どのような経緯をたどり、どのような結実をもたらしたのかという視点に立ち、改めて戦後の歩みを見つめ直す。

1 戦後民主化と町内会・部落会

戦後の混乱と困窮のなか、市民は必死に日々の生活の再建を目指して立ち上がった。私たち市民に最も身近な自治組織として今日まで続く自治会や町内会等は、当時どのような変遷を経たのであろうか。

わが国では、戦時体制下の町内会・部落会は行政の末端組織に組み込まれ、戦争遂行に協力したとして、戦後、GHQ（連合国軍総司令部）から問題視されることになった。その意向を受けた政府は、1947（昭和22）年に「町内会部落会又はその連合会等に関する解散、就職禁止その他の行為の制限に関する政令」を公布し、全国の町内会・部落会等は解散することになったのである【資料編 資料7-1】。

このときの盛岡市常会（市幹部と町内会長等の月例会議）における困り切った様子を、当時の市公報はこう伝えている。「町内會、部落會は來たる三月末日限りを以て廢止されることになりました。ついては其^その後の措置を如何様にするを適當^{てきとう}とすべきやにつき御協議願ひたきこと」（『盛岡市公報』1947年3月15日）。

しかし、現実には町内会・部落会は食糧配給や公衆衛生など市民生活に欠かせない機能を担っており、その代替機能の確保は、戦後復興に忙殺される市当局にとっても市民にとっても

喫緊の課題であった。実際、同様の状況に置かれた全国各地の自治体でも、さまざまな手法で実質的にはその活動は継続したといわれる。一例を挙げれば、小浜（1994）は東京都台東区^{やなか}谷中地区を例に、「町内会廃止令の下で文化会、親和会などの名称を用い、実質的には町内会活動を続けていた」とし、1952～54年頃には元の名前の復活も見られたことを示している【7001】。

7001 台東区谷中地区における住民組織の名称の変遷

地区	廃止令後	復活後
下根岸町	下根岸電力自制会→鶯都歌文化会	下根岸町町会
北稻荷町	親和会→北稻荷親和会	北稻荷神会
下車坂町	文化会	不明

（『占領下における町内会の再編過程—台東区・谷中地区の事例から』から作成）

2 盛岡市の対応

盛岡市でも類似の状況にあったことは推察に難くない。市は、1947（昭和22）年に臨時的な行政連絡員制度を市内140地区単位に設けたが、「旧町内会の再現的な傾向」「追放者や旧町内会、隣組などの幹部と相通じたりするような風評」（『盛岡市公報』1949年6月20日）があったとして、1949年にこれを廃し、新たに支所の増設と地区担当員の設置を打ち出した。町内会等の実質的な力への依存は簡単には一掃できなかったことが分かる。

さらに、町内会等に代わり物資配給、納税等の末端業務を担うために配給自治運営委員会、納税貯蓄組合、衛生班などが設立された（これらが、現在に続く「縦割り型」の各種地域団体の原型になっていく）。それらについて、市は従来の町内会等とは性格が異なるものとし、「昔のような町内会のような存在を絶対排除して地方自治の民主的発展を期さなければなりません」と力説している【資料編 資料7-4】。



盛岡市史現代

通史編 下卷